

社会への貢献・還元を

高井伸夫弁護士の

人事労務

散歩道



25

大きいであろう。

世界的にみて日本全体の貧困化がますます進んでいる現状をどうにかして打破するためには、効果的な経済政策・法整備が必要であることはもちろんだが、企業経営の現場も、いま一度人間としての初心に謙虚に立ち戻らなければならないというのが、私の強い思いである。

我欲にとらわれたものであってはならず、企業がいかに社会への貢献・社会還元を果たすかという企業としての大義を示す「道義」に基づくべきである。そして、社会への貢献や還元の精神は、その企業に高い志をもたらすことにもなり、結果として、より良い人材が集まるのである。

これからの採用(2)——道義・道徳

企業として大義示せ

優秀な人材集まる契機に

第2に、「道義」について言えば、企業は、理詰めの経営、論理的に説明可能な経営をめざさなければならない。特定の人間関係や慣例に依存する「なれあい経営」が幅を効かせている。第3に、「道徳」について言えば、論語に「徳は

私は、採用の重要性を「道義・道徳」の視点からライアントや読者の皆さんにわかりやすく説くために「事業戦略・企業戦略は採用戦略に宿る」という警句をしばしば用いてきた。優秀人材の争奪戦がグローバル規模で展開されている今日にあっては、私のこの造語は、いよいよ問題の真髄をついてきていると言え、自費になるだろうか。

企業経営と採用について、最近私が特に重要であると感じるのは、「道義・道徳」の観点から、

『次郎物語』の作者・下村湖人先生(1884〜1955)の生家(現在佐賀県神埼市)を、昨

あり、願いでもある。第1に、企業経営も採用も、コスト意識を徹底することが重要であるが、これは目先の利益や

本コラムは、原則として毎月1回掲載します。